

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2015年2月8日

[テーマ] 貨幣流通と戦国大名たち

先日、経済情勢に関する意見交換のために沼田市を訪れた。沼田市のある北毛地域は、農業や観光業を中心に大きな潜在力を有している地域だ。企業や金融機関の経営者の方々が、地域経済の発展に強い意気込みを持たれていることに感銘を受けた。

中でも、いつも冷静な地元信用金庫の理事長が、真田家ゆかりの土地としての沼田の魅力を熱く語っておられる様子はとても印象的であった。

真田家が沼田を支配していたのは16世紀後半～17世紀。この頃は、わが国の貨幣史にとっても重要な転換点にあたる。中国から輸入した銭貨（銅や鉄など、金・銀以外の金属で作られた貨幣）が広く流通していた時代に代わって、徳川幕府によって金貨・銀貨・銭貨による「三貨制度」が整備され、わが国独自の統一的な貨幣体系が確立していった時代である。

銭貨は、多くの戦国大名にとって、戦時における信仰の象徴、あるいは領内の経済基盤として切っても切れない存在であったのだろう。真田家の有名な家紋「六連銭」は銭貨をモチーフとしたものだ。三途さんずの川の渡り賃として棺に銭6文を入れる埋葬銭貨「六道銭」に由来するとされており、真田一族の覚悟を示すものとも言われている。

「長篠合戦図屏風びょうぶ」には、「永楽通宝」を旗印としている織田軍が描かれている。織田信長が早くから流通貨幣の重要性に気付いていたことを示すものではないかなどと思うと、興味が尽きない。

一方で、「銭貨の時代」から「三貨制度」への発展の礎を担ったと考えられるのが、真田家とも関係のあった甲斐・武田氏である。中国からの銭貨輸入の途絶により銭貨の流通量が減少していく中、各地の戦国大名は競って鉱山を開発し金貨・銀貨の鑄造に取り組んだ。特に、甲州における金貨の鑄造・流通は顕著であったようだ。「甲州金」は、その貨幣単位が江戸時代の金貨の単位に引き継がれたこともあって、わが国の金貨のルーツとして語られている。

少し気が早いですが、来年のNHKの大河ドラマは真田幸村の生涯を描く「真田丸」。ゆかりの地にとって明るい話題の一つになることを期待したい。私も、今年の「花燃ゆ」とともに、県外の友人・知人らに大いに宣伝していきたいと思う。

（ 日本銀行前橋支店長
富田 淳 ）